老死

〔保暦間記〕頼朝〇中略其後鎌倉へ入給テ、則病付給ケリ、次年ノ正月、正治元年正月十三日、終ニハ失給ヌ、五十三ニゾ成給フ、是ヲ老死ト云ベカラズ、偏ニ平家ノ怨霊也、多クノ人ヲ失給ヒシ故トゾ申ケル、

病死

〔日本書紀二十九天武〕五年六月、四位栗隈〇隈原作限今改王得病薨、物部雄君連忽發病而卒、

〔玉勝間八〕しぬるを病死といふ事

今の世、おほやけざたの文書などには、人の死ぬるを病死といふこと也、そもく人は、病ならで死ぬるは、百千の中に、まれに一人二人などこそ有べけれ、おしなべては、みな病てしぬることなれば、それをとり分てはいはでも有ぬべくおぼゆるを、これむかしみだれ世のころは、戰ひて死ぬるもの、多かりし故に、病死は病死と、分ていへりし時のならひのまゝなるべし、

〔伊呂波字類抄疊字〕頓死

頓死

〔運歩色葉集登〕頓死

〔文德實錄六〕齊衡元年十二月甲寅、是日木工頭正五位下石川朝臣長津頓死於寮中、

〔今昔物語三十一〕藏人式部丞貞高於殿上俄死語第廿九

今昔、圓融院ノ天皇ノ御時ニ、内裏焼ニケレバ、□□院ニナム御ケル、而ル間殿上ノ夕サリノ大盤ニ、殿上人藏人數著テ物食ケル間ニ、式部丞ノ藏人藤原ノ貞高ト云ケル人モ著タリケルニ、其ノ貞高ガ俄ニ低シテ大盤ニ顔ヲ宛テ、喉ヲクツメカス樣ニ鳴シテ有ケレバ、極テ見苦カリケルヲ、〇中略主殿司寄テ搜テ、早ウ死給ヒニタリ、

〔吾妻鏡四十六〕建長八年〇康元元年正月十二日甲辰、卯時剋於相州贄殿下部男一人寢死、可爲卅箇日穢云云、

〔下學集下態藝〕横死ワウシ

横死